

屁

新美南吉

青空文庫

石太郎が屁の名人であるのは、淨光院の是信さんに教えてもらうからだと、みんながいつていた。春吉君は、そうかもしれないと思つた。石太郎の家は、淨光院のすぐ西にあつたからである。

なにしろ是信さんは、おしもおされもせぬ屁へこきである。いろいろな話が、是信さんの屁について、おとなたちや子どもたちのあいだに伝えられている。是信さんは、屁で引導いんどうをわたすという。まさかそんなことはあるまいが、すいこ屁（音なしの屁）ぐらいたるには、お経きょうの最中ほうちにするかもしれない。

また、ある家の法会で鐘かねをたたくかわりに、屁をひつてお経を

あげたという。これも、おとながおもしろ半分につくつたうそらしい。だが、これだけはたしかだ。是信さんは、正午の梵鐘^{ぼんしょう}をつきながら、鐘の音の数だけ、屁をぶつぱなすことができるということである。春吉君は、じぶんでその場面を見たからだ。

石太郎が是信さんの屁弟子^{でし}であるといううわさは、春吉君に、淨光院の書院まどの下の日だまりに、なかよく日なたぼっこしている是信さんと、石太郎のすがたを想像させた。茶色のはん点がいっぱいある、赤みがかつたつやのよい頭を日に光らせ、洗いふるしたねずみ色の着物の背^せをまるくしている、年よりの是信さん。顔のわりあいに耳がばかに大きい、まるでふたつのうちわを頭の両側につけているように見える、きたない着物の、手足があかじ

みた石太郎。

きっと石太郎は、学校がひけると、毎日是信さんとそういう情景をくり返しながら、屁の修業しゆぎょうをつんでいるのだろう。まったくかれは屁の名人だ。

石太郎は、いつでも思いのままに、どんな種類の屁でもはなてるらしい。みんなが、大きいのをひとつたのむと、ちょっと胸算用んようするようなまじめな顔つきをしていて、ほがらかに大きい屁をひる。小さいのをたのめば、小さいのを連発する。にわとりがときをつくるような音を出すこともできる。こんなのは、さすがに石太郎にもむずかしいとみえ、 shinちようなおももちで、からだ全体をうかせたりしづめたり——つまり、調子をとりながら

出すのである。そいつがうまくできると、みんなで拍手かつさいしてやる。

しかし石太郎は、そんなときでも、屁をくらつたような顔をしている。その他、とうふ屋、くまんばち、かにのあわ、こごと、汽車など、石太郎の屁にみんながつけた名まえは、十の指にあまるくらいだ。

石太郎が屁の名人であるゆえに、みんなはかれをけいべつしていた。下級生でさえも、あいつ屁えこき虫ぎふんと、公然指さしてわらつた。それを聞いても、石太郎の同級生たちは、同級生としての義憤を感じるようなことはなかつた。石太郎のことで義憤を感じるなんか、おかしいことだつたのである。

石太郎の家は、小さくてみすぼらしい。一歩中にはいると、一種異様なにおいが鼻をつき、へどが出そうになる。そして、暗いので家の中はよく見えない。石太郎は、病氣でねたつきりのじいさんとふたりだけで、その家に住んでいる。

どこかへかせぎに出ているおとつあんが、ときどき帰つくる。おつかあは、早く死んでしまつて、いない。石太郎は、ポンツク（川漁^{かわりよう}）にばかりいく。とつてきたふなや、どじょうを、じいさんにたべさせる。また、買いにいけば、どじょうやうなぎを売つてくれるということである。

石太郎の着物は、いつ洗つたとも知れず、あかでまつ黒になつてゐる。その着物に、家の中のあの貧乏^{びんぱう}のにおいや、ポンツク

のなまぐさいにおいをつけて、学校へやつてくる。そのうえ、注文されなくてもかれは、ときおり放屁する。

みんなは、石太郎のことを、屁えこき虫としてとりあつかっている。石太郎のほうでも、そのほうがむしろ気楽なのか、一どもふんがいしたことはない。生徒ばかりでなく、たいていの先生まで、石太郎を虫にしているので、石太郎は、だんだんじぶんでも虫になつていつた。かれは、教室で、いちばんうしろに、ひとりでふたり分のつくえをあたえられていたが、授業中にあまり授業に注意しなかつた。たいていは、ナイフで鉛筆に細工していた。

またかれは、まじめになるときがなくなつてしまつた。屁の注文をうける場合のほかは。かれは、いつもぐにやぐにやし、えへら

えへらわらつていた。

春吉君は、一ど、石太郎のことで、じつにはずかしいめにあつたのである。

それは五年生の冬のことである。三年間受け持つていただいた、年よりの石黒先生が、持病(じびよう)のぜんそくが重くなつて、授業ができなくなり、学校をおやめになつた。かわりに町から、わかい、ロイド眼鏡(めがね)をかけた、かみの長い藤井(ふじい)先生がこられた。

春吉君の学校は、かたいなかの、百姓(ひやくしよう)の子どもばかり集まつている小さい学校なので、よそからこられる先生は、みな、都会人のように思えたのだつた。藤井先生をひと目見て、春吉君はいきづまるほどすきになつてしまつた。文化的な感じに魅せられ

たのである。石黒先生もよい先生であつたが、先生は生まれが村の人のなので、ことばが、生徒や村のおとなたちの使うのとほとんど変わらないし、年をとつていられるので、体操など、ちつとも新しいのを教えてくれない。走りあいか、ぼうしどりか、それでなければ、砂場ですもうをとらせる。いちばんいやなのは、話をしている最中に、せきをしあじめることである。長い長い、苦しげなせき。そして、長いあいだ、さんざ苦労をしたあげく、のどからやつと口までうち出したたんを、ポケットに入れて持つている新聞紙のたたんだの中へ、ペツペツとはきこみ、その新聞紙を、まだいじそうにポケットにしまうのである。

さて、藤井先生が、はじめて春吉君の教室にあらわれた。はじ

めて生徒を見る先生には、生徒は、みないちようく見える。よく、それぞれの生徒の生活になると、それぞれの生徒の個性がはつきりしてくるが、顔を最初見たばかりでは、わからない。だれがりこうで、だれがしようもないあほうであるかも、わからない。

藤井先生はまず、教卓きょうたくのすぐ前にいる坂市君さかいちにむかつて、「きみ、読みなさい」といった。それは読み方の時間だった。

「きみ」ということばが、春吉君をまた喜ばせた。なんという都合ふうことばだろう。石黒先生はこんなふうにはよばなかつた。先生は、生徒の名を知りすぎていたから、「源やい読め」とか、「照てるン書かけ」とかいつたのである。

坂市君が読んでいきながら、知らない字をのみこむようにして

とぼしたり、あいまいにごまかしたりすると、石黒先生はそんなのをほつたらかしておかれたのに、わかい藤井先生は、いちいち、え、え、と聞きとがめられた。そんなことまで、春吉君の気にいつた。もうなにからなにまで、この先生のすることはよかつた。

藤井先生は、坂市君から順順にうしろへあてられた。四人めには、春吉君がひかえている。春吉君は、この小さい組の級長である。春吉君は、きりつとした声をはりあげて、朗々ろうろうと読み、未知のわかい先生に、じぶんが秀才であることをみとめてもらうつもりで、番のめぐつてくるのを、いまやおそしと待っていた。

いよいよ春吉君の番だ。春吉君は、がたつとこしかけをうしろへのけ、直立不動のしせいをとり、読本とくほんを持った手を、思いき

り顔から遠くへはなした。そして、大きいくいきをすいこみ、いや第一声をはなとうとしたとたん、つごうのわるいことが起こつた。ちょうどそのとき、藤井先生は、机間^{きかん}巡回^{じゅんしゅ}の歩を教室のうしろの方へ運んでいられたが、とつじよ、ひえつというような悲鳴をあげられ、鼻をしつかとおさえられた。

みんながどつとわらつた。また、屁^へえこき虫の石が、例のくせを出したのである。

なんというときに、また、石太郎は屁をひつたものだろう。春吉君は、すかをくらわされたように拍^{ひょうし}子ぬけして、わらえもしなければおこれもせず、もじもじして立つていた。

藤井先生はまゆをしかめ、あわててポケットからとり出したハ

ンケチで、鼻をしつかとおさえたまま、こりやひどい、まつたくだ、さあまどをあけて、そつちも、こつちもと、さしづされ、しばらくじつとしてなにかを待つていられたが、やがて、おそるおそるハンケチを鼻からとられ、おこつてもしようがないといいうよに、はつはつと、顔の一部分でみじかくわらわれた。だがすぐきつとなられて、だれですか、今のは、正直しょうじきに手をあげなさいと、見まわされた。

石だ、石だ、と、みんながささやいた。藤井先生は、その「石」をさがされた。そして、いちばんうしろの壁かべぎわに発見した。石太郎は、新しい先生だからてれくさいとみえて、つくえの上に立てた表紙のぼろぼろになつた読本とくほんのかげに、かみののびた頭を

かくすようにしていた。

立っていた春吉君は、そのとき、いい知れぬ羞恥の情にかられた。じぶんの組に、石太郎のような、下劣なものがいるということを、都会ふうの、近代的な明るい藤井先生が、どうお考えになるかと思うと、まったく、いたたまらなかつた。

藤井先生は、相手を見てすこしことばの調子をおとしながら、いろいろ石太郎にきいたが、要領を得なかつた。なにしろ石は、くらげのように、つくえの上でぐにやつくばかりで、返事というものをしなかつたからである。

そこで近くにいる古手屋の遠助とおすけが、とくいになつて説明申し

あげた。まるで見世物の 口こうじょう 上じょう いいのように、石太郎はよく屁へをひること、どんな屁でも注文どおりできること、それには、それぞれ名まえがついていること 等とうとう 等とうとう。

春吉君は、古手屋の遠助のあほうが、そんなろくでもないことを、手がら顔して語るのを聞きながら、それらのすべてのことを、あかぬけのした、頭をテカテカになでつけられた藤井先生が、どんなにけいべつされるかと思って、じつにやりきれなかつたのである。

一年おきにやつてくる、町の小学校との合同運動会でも、春吉君は、石太郎の存在をうらめしく思つた。その日には春吉君の学校は、白いべんどうのつつみを背せなか中にしよつて、半里ばかりの道

を、町の大きい小学校へやつていく。大きなりっぱな小学校である。木づくりの古い講堂があり、えび茶のベンキでぬられた優美な鉄さくが、門の両方へのびていつている。運動場のすみには、遊動円 えんぱく 木や かいせんとう 回旋塔など、春吉君の学校にはないものばかりである。ここ的小学校の生徒や先生は、みな、町ふうだ。うすいメリヤスの運動シャツ、白いパンツ、足にぬつたヨジウム。そして、ことばが小鳥のさえずりにて軽快だ。

春吉君は、一步門内にはいるときから、もうじぶんたち一団のみすぼらしさに、はずかしくなつてしまふ。なんという生彩せいさい のないじぶんたちであろう。友だちの顔が、さるみみたいに見える。よくまあこんな、べんとう風呂敷ふろしき をじいさんみたいにしよつてき

たものだ。まつたくやりきれないなかふうだ。

こういう意識いしきが、運動会のおわるまで、春吉君の中でつづく。ちよつとでも、じぶんたちのふていさいなことをわらわれたりすると、春吉君はつきとばされたように感じる。町の見物人たちのひとりが、春吉君のことを、まあ、じょうぶそうな色をしてと、つぶやいたとしても、春吉君は恥辱ちじょくに思うのである。町の人があおどろくほどの健康色、つまり、日焼けしたはだの色というものは、町ふうではなく在郷ざいごうふうだからだ。

ある人びとは、保護色性ほごしきょくせいの動物のように、じき新しい環かんきよ境きょうに同化されてしまう。で、藤井先生も、半年ばかりのあいだに、すっかり同化されてしまった。つまり都会気分がぬけて、い

なかじみてしまつた。洋服やシャツはあかじみ、ぶしょうひげはよくのびており、ことばなども、すつかり村のことばになつてしまつた。「なんだあ」とか、「ところせえ」とか、「こいつがれ」などと、春吉君がそのことばあるがため、じぶんの故郷こきょうをきらつているような、げびた方言を、平氣で使われるのである。春吉君が、藤井先生も村の人になつたということをしみじみ感じたのは、麦のかられたじぶんのある日だつた。

午後の二時間め、春吉君たちは、校庭のそれぞれの場所にじんどつて、水彩の写生をしていた。小使室のまど下に腰をおろして、学校のげんかんと、空色にぬられた朝礼台と、そのむこうのけしのさいているたんざく型の花だんと、ずうつと遠景にこちらをむ

いて立つてゐる二宮金次郎の、本を読みつつまきをせおつて歩いて
 いるみかげ石の像とをとりいれて、一心に彩筆^{さいひつ}をふるつていた
 春吉君が、ふと顔をあげて南を見ると、学校の農場と運動場のさ
 かいになつてゐる土手^{どて}の下に腹ばつて、藤井先生が、なにか土手
 のあちら側にむかつてあいざをしていられる。

いちはやく気づいたものがもうふたり、ばらばらとそちらへ走
 つていくので、春吉君も画板^{がばん}をおいてかけつけると、土手の下に、
 水を通ずるため設けてある細い土管の中へ、竹ぎれをつっこんで
 いる先生が、落ちかかつて鼻の先にとまつてゐる眼鏡^{めがね}ごしに春吉
 君を見て、

「おい、ぼけんと見とるじゃねえ、あつちいまわれ。こん中にい

たちがはいつとるだぞ。今こつちからつつつくから、むこうで、
屁えこき虫といつしょにかまえとつて、つかめ。にがすじやねえ
ぞ」

と、つばをとばしながらおっしゃった。

むこう側へこしてみると、なるほど、屁えこき虫の石太郎が、
このときばかりはじつにしんけんな顔つきで、そこのどろみぞの
中にひざこぶしまではいって、土管の中へ、右手をうでのつけね
までさし入れている。うでをすっかり土管の中につつこんでいる
ので、しぜん頭が横むけに土手の草におしつけられ、なにか、土
手の中のかすかな物音に、耳をすまして聞いているといった風情ふぜい
である。

じき近くにあるあひる小屋にいる二わのあひるが、人のけはいでひもじさを思い出したのか、があがあとやかましく鳴きだした。

春吉君は、どろみぞの中へとびこんでいく気にはなれなかつたし、石太郎が土管のあなを受け持つてゐるからには、よけいな手だしはしないほうがいいので、ほかのものといつしょに見ていた。

「ええか、ええかあ、にがすなよおつ」

という藤井先生の声が、地べたをはつてくる。石太郎はだまつて、依然、土手の声に聞き入つていたが、やがて、土手についていたもう一方の手が、ぐつと草をつかんだかと思うと、土管の中から、右手を徐々にぬきはじめた。

首ねっこを力いっぱいにぎりしめられていた大きないたちは、

窒息のためもうほとんど死んだようになつていて、土管の外へ出ると、だらりとえりまきを見るようにぶらさがつたが、すこし石太郎が手をゆるめたのか、なにかかき落とそうとするように、四肢をもがいた。するとそのとき、どろみぞからあがつていた石太郎は、ちくしようと口ばしつて、目にもとまらぬ敏捷さで、いたちを地べたへたたきつけた。

ぼたつと重い音がして、古いたちは、のびてしまつた。春吉君は、いつも水藻のような石太郎が、こんなにはつきり、ちくしょうつという日本語を使つたこともふしげだつたし、こんなにすばしこい動作ができるということも不可解な気がした。

それはともかく、そのとき春吉君は、藤井先生が、このかたい

なかの、学問のできない、下劣で野卑な生徒たちに、しごく適した先生になられたことを感じたのである。といって、べつだん失望したわけでもない。けつきよく、親しみをおぼえて、それがよかつたのだ。

藤井先生は、石太郎ととらえたあのいたちを、へびつかみの甚じ太郎に、二円三十銭で売った。その金で、小使いのおじさんと一ぱいやつたという話を、二、三日して春吉君は、みんなからただおもしろく聞いた。先生はまだ独身で、小使室のとなりの宿直室で寝起きしていられたのである。

教室でも先生が変化したことは、同じことだつた。坂市君や、源五兵衛君や、照次郎君などが、知らない文字をうのみにして

読本とくほんを読んでいつても、最初のころのように、え、え、と、優美にとがめるようなことはされなくなつた。年よりの、ぜんそくもちの石黒先生と同じように、知らんふりしてズボンのポケットに両手をつつこんで、つくえのあいだを散歩していられるのであつた。

こういうぐあいに、すべての点で藤井先生はいなかの氣ふうにならされ、のみならず、いなかふうをマスターするようになさえなつたのだが、石太郎の、授業中にときどき音もなくはなつ屁へにだけは、あくまで妥協できなかつたのである。

情景はおおよそ、次第しだいがきまつっていた。まず最初にそれを発見するのは、石太郎の前にいる学科のきらいな、さわぐことのすき

な、顔ががまににている古手屋の遠助とおすけである。かれは、先生のまじめなお話などいさきかもわからないので、どんなに、クラス全体が一生けんめいに先生の話に傾聴けいちょうしているときでも「あつ、くさつ、あつ、あつ」といいだす。

すると、教室のその一角かくから、「あつ、くさつ、あつ、くさつ」という声が、波紋はもんのようにひろがり、ざわめきだす。すると藤井先生は、あわててハンケチを胸のポケットから出す。（あまり倉卒うそつにとり出でるので、頭髪とうはつをすく小さいくしが、まつわつてとび出したこともある）ハンケチで鼻をしつかりとおさえる。鼻声で、まどをあけろ、まどを、そつちも、こつちもと、下知げちなさる。それから南のまどぎわへ歩いていつて、外の空氣をすうために、

ややハンケチをおはなしになる。藤井先生のいつもきまつた動作がおもしろいので、生徒らは、男子も女子も、ますます、くさいとさわぐ。すると、古手屋の遠助が、きょうは大根屁だいこんべだとか、きょうはいも屁いもべだとか、きょうは、えんどう豆屁とうべだとか、正確にかぎわけて、手がら顔にいうのである。

みんなは、遠助の鑑識眼かんしきがんを信用しているので、かれのいつたとおりのことばを、また伝えはじめる。

「あ、大根屁だ。大根くせえ」

というふうに。ようやく喧騒けんそうが大きくなつたころ、先生は、「だれだつ」

と一かつされる。一同はびたつと沈黙する。そして申しあわせた

ように、教室の後方に頭をめぐらす。みんなの視線の集まるところに、屁えこき虫の石太郎が、てれた顔をつくえに近くさげて、左右にすこしずつゆすつてているのである。

その 静寂^{せいじやく} の時間がやや長くづくと、石だ、石だ、という声が、こんどはだれいうとなく、石太郎よりもつとも遠い一角より起こつてくる。藤井先生は黒板のうらがわにかけてある竹のむちを持つて、つかつかと石太郎のところへいき、いいかげんにしどけと、むちのえで、石太郎のこめかみをこづかれる。そのときは先生も、石太郎と協力してとつた古いたちの代で、一ぱいいけたことは、忘れていられるように見えるのである。

こういう情景は、もうなんどくり返されたかしれない。いつも

判でおしたかのごとく同じ順序で。

秋もはじめのころの、学校の前の松の木山のうれに、たくさんのからすがむれて、そのやかましく鳴きたてる声が、勉強のじやまになる、ある晴れた日の午後であつた。

春吉君たちは、六時間めの手工しゅこうをしていた。その日の手工は、かわら屋の森一君がバケツ一ぱい持つてきたねんどで、思い思いの細工さいくをするのである。

春吉君は茶のみ茶わんをつくつていた。ほんとうの茶わんのようく、土をうすく、しかも正しい円形につくることは、なかなかよいではない。すでになんべんも、できあがつた茶わんが意にみたず、ひねりつぶし、またはじめからやりなおしていた。そし

てついに、こんどこそはと思われる逸品^{いつひん}ができあがりつつあった。春吉君は、細心の注意をはらつて、竹べらをぬらしては、茶わんのはらの凹凸^{おうとつ}をならしていった。

すっかり茶わんに心をうばわれ、ほかの、いつきいのことを忘れていたが、ふとわれに返つた春吉君は、「しまつた」と思つた。

朝からすこし腹ぐあいがわるく、なにか重いものが下腹いつたいにつまつている感じで、ときどき、ぷつぶつと豆のにえるような音もしていたので、ゆだんすると屁^へをするぞと、心をいましめていたのだが、ついに、しごとに熱中していく、今その屁を音もたてずにしてしまつたのである。おかげで腹がかるくなつたが、腹のかるくなるほどの屁というものは、はげしい臭氣をともなつて

いるはずだと、春吉君は思つた。

うまくだれも気づかずにしてくれればよいがと、春吉君はひそかに願つた。ならびの席にいる源五兵衛君げんごへいべえは、鼻じるをすすりながら、ぶかつこうに大きな動物——たぶん、かめだろうと思われるが、ともかく四足動物の四本めの足をくつつけようと努力している。うしろの照次郎君よのすけも、与之助君よのすけも、それぞれの制作に余念がない。

すこし時間がたつた。春吉君はたすかつたと思つた。と、そのせつな、古手屋の遠助が、あ、くせ、と、第一声をはなつた。すぐにはくせえ、くせえ、という声が、四方に伝わつた。春吉君は、はずかしさで顔がほてつてきた。

いつもと同じさわぎがはじまつた。屁えこき虫の石太郎が屁をはなつたときと、寸^{すんぶん}分ちがわぬことが。春吉君は、どうしていいのかわからない。もう、なりゆきにまかすばかりだ。

やがて古手屋の遠助が、きょうは大根菜屁^{だいこんなつべ}だといった。なんという銳敏^{えいびん}な嗅^{きゆう}覚^{かく}だろう。たしかに春吉君は、けさ大根菜のはいつたみそしるでたべてきたのである。

やがてさわぎが大きくなりだしたころ、藤井先生が例によつて、「だれだつ」

とどなられた。春吉君は意味もなくねんどをひねりながら、いきをのんて、^{おもて}面^{おもて}をふせた。みんなの視線が、ちようどいつも石太郎

の上に蝋集いしゅうするように、きょうは、じぶんにそそがれているのだと思いながら。

いまにどこからか、春吉君だという声が起こつてくるにそういう、と思った。そういうふうにすつかり観念かんねんしていたので、石だ、石だ、というあやまつた声があがつたときには、じぶんの頭上に落ちてくるはずのげんこつが、わきにそれたように、ほつとしだきみような感じになつた。

顔をあげてみると、意外にも、みんなの視線は、春吉君に集中されておらず、やはり石太郎の方にむいているのだ。

藤井先生が、黒板のうらにかかっているむちをとつて、つかつかと石太郎の前に歩いていかれる。春吉君の心の底から、正義感

がむくつと起きてきた。じぶんだといつてしまおうか、しかし、だれひとり、じぶんをうたがつてはいないのである。ここで白状するのは、なんともはずかしい。先生が石太郎の席に達するまでのみじかい時間を、春吉君の中で正義感と羞恥心しゅうちしんとが、めまぐるしい闘争をした。それが春吉君の動悸どうきを、鼓膜こまくにドキッドキッとひびくほど、はげしくした。そして、しばらく正義感がおさえられた。

反射的に、ねんどを親指と人さし指の腹ですりつぶしながら、春吉君は見ていた。石太郎はいつもと変わらず、てれた顔をつくえに近くゆすつている。いまに、おれじやないと弁解するかと、春吉君がひそかにおそれながらも期待していたのに、その期待も

うらぎられた。石太郎は、むちでこめかみをぐいとおされ、左へぐにやりとよろけたが、依然いぜんてれたような表情で、沈黙しているばかりである。

春吉君はよぎなく、じぶんの罪を白状させられる機会は、ついにこなかつた。これでさわぎはすんでしまつた。一同は、ふたたび作業にとりかかつた。

しかし春吉君だけは、事がまだ終末にいたつていない。気持ちにせおいきれぬほどの負担ができてしまつた。春吉君には、こんな経験は、生まれてはじめてといつてもよい。春吉君は今まで、修身の教科書の教えているとおりの、正しいすぐれた人間であると、じぶんのことを思つていた。

今、じぶんが沈黙を守つて、石太郎にぬれぎぬをきせておくことは、正しいことではない。じぶんは、どうどうというべきである。いまからでもよい。さあ、いまから。そう口の中でいいながら、どうしても立ちあがる勇気が出ないのであつた。

春吉君はくやしさのあまり、なきたいような気持ちになつてきた。それをはぐらかすために、できあがつていただいじな茶わんを、ぐつとにぎりつぶしたのである。

*

まつたくこれは、春吉君にとつて、この世における最初の、じぶんで処理せねばならぬ煩悶はんもんであつた。それは家へ帰つてからも、つぎの日学校にふたたびくるまでも、しつこく春吉君のあと

をつけてきた。たいていのなやみは、おかあさんにぶちまければ、
そして場合によつては少々なけば、解決つくのだが、こんどは、
そういうわけにはいかない。

だいいち、どういつておかあさんに説明したらいいのか。雑誌
がほしいとか、おとうさんのだいじな鉢はちをわつてしまつたとかな
らば、かんたんにじぶんのなやみを知つてもらえるが、これはそ
んなやさしいものではない。複雑さが、春吉君の表現をこえてい
る。屁へをひつた話などしたら、まつきにおかあさんはわらいだ
してしまうだろう、とても、まじめにとつてくれぬだろう。

春吉君は、ただじぶんの正しさというものに汚点がついたのが、
しゃくだった。ちょうど、買つたばかりの白いシャツに、汚泥おでいの

飛沫ひまつをひつかけられたように。

石太郎にすまないという気持ちや、石太郎はぎせいに立つてえらいなという心は、ぜんぜん起こらなかつた。石太郎が弁解しなかつたのは、他人の罪をきて出ようというごときこうけつ高潔こうじくな動機からでなく、かれが、歯がゆいほどのごずだつたからにすぎない。

また石太郎は、なんどむちでこづかれたとて、いつこう骨身ほねみにこたえない。まるで日常茶飯事さはんじのようにこころえているのだから、いさきかも、かれにすまないとと思う必要はないわけである。

むしろ、石太郎みたいな屁の常習犯がいたために、こんななやみが残つたのだと思うと、かれがうらめしいのである。

しかし、ときが、春吉君の煩悶はんもんを解決してくれた。十日もす

ると、もうほとんど忘れてしまつた。

だが春吉君は、それからのち、屁はどうが教室で起こつて、例のとおり石太郎がしかられるとき、けつしていぜんのようにかんたんに、それが石太郎の屁であると信じはしなかつた。だれの屁かわからぬ。そしてみんなが、石だ、石だといつているときに、そつとあたりのものの顔を見まわし、あいつかもしれない、こいつかもしれないと思う。

うたがいだと、のこらずのものがうたがえてくる。いや、おそらくは、だれにも今までに、春吉君と同じような経験があつたにそういうないと考えられる。

そういうふうに、みんな狡猾こうかつ そうに見える顔をながめている

と、なぜか春吉君は、それらの少年の顔が、その父親たちの狡猾な顔に見えてくる。おとなたちが、せちがらい世の中で、表面はすずしい顔をしながら、きたないことを平氣でして生きていくのは、この少年たちが、ぬれぎぬをものいわぬ石太郎にきせて知らん顔しているのと、なにか、にかよつていてる。しぶんもそのひとりだと反省して、自己嫌惡じこけんおの情がわく。だが、それは強くない、心のどこかで、こういう種類のことが、人の生きていくためには、肯定こうていされるのだと、春吉君には思えるのであつた。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

初出：「企爾賓日日新聞」

1940（昭和15）年3月23日～3月30日

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2001年9月4日公開

2013年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

屁

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>